米ソに睨まれた鼠

前号で藤原正彦は昭和十六年生まれと記したが十八年生まれが正しい。校正ミスである。申し訳ありません。私は十六年に山東省の済南で生まれ、戦後藤原同様日本に引き揚げてきた〝敗戦国民〟のひとりである。だが今まで一度も、当時の国や国の指導者を憎んだり恨んだことはない。

経営管理講座
染谷和巳 308

依存心の強い人中心の社会に

済南（チーナン）から青島（チンタオ）港までは鉄道で三〇〇キロ。満州ほど遠くはないが、引き揚げ者を満載した貨物列車は自転車より遅い時速一〇キロ程でコトコト走り、停車場ごとに長時間停車して燃料と人を詰め込んだ。

水などを求めて外に出て戻ってこない人がいた。貨車の床は穴だらけでござが敷いてあったが、夜の停車場で中国人は貨車の下にもぐり込みござを剥いで引き揚げ者の持ち物を盗んだ。

母親は男の服を着て髪を切り顔を炭で黒く塗っていた。その格好は茨城の父の実家に着くまで変わらず、島田に結った和服姿のまだ若い母しか知らない親類は、その姿を見て言葉がなかったと後に聞いた。

やがて二歳の私の弟が餓死し、飢えと貧乏の長い年月が続くが、父母は愚痴や悪口は一言も口にしなかった。食うため食わせるために必死だったし、本も読まない無学のせいもあるが、自分たちをこんな目に合わせた国の指導者を非難することはなかったし、兵隊だった父親がつらい経験をしただろうに、軍隊を批判する言葉を一度も聞いたことがない。

もちろん当時の私は畑のさつま芋やきゅうりを盗み食いする猿並の子供で、憎む、恨むという感情は持ち合わせていなかった。

この憎む、恨むという感情は、裏返せば「援助しろ」「国は何もしてくれない」「補償しろ」という依存心になる。

当時国家は疲弊していてお金もなかったので補償金など出せなかった。私の父母だけでなく当時の日本人は国の支援をアテにせず、みな自力で食い物を得、食い扶持を稼いだ。国が豊かになってからも当時の大人は国に何も要求しなかった。

何かあるとすぐ国や企業に「責任をとれ」「補償しろ」と騒ぐようになったのは、日本が豊かになってから育った人々である。生活保護を受ける人の数が右肩上がりで増え続けていることや、東北大震災の〝被害者〟の中に三年たっても働かずに補助金暮らしをしている人がいることが一例である。

日本人の自立心が衰え、依存心が増殖している。「一身独立して一国独立す」と説いた福沢諭吉がこのあり様を見て泣いている。

依存心の強い人は国を非難し国に求める。自立心の強い人は国に頼らず国のために尽くす。

出光興産の創業者出光佐三は官と癒着する石油卸業界と戦って勝ち、日本の石油業界を健全なものに改革した。

クロネコのヤマト運輸の創業者小倉昌男は運輸省、郵政省のがんじがらめの規制や国鉄や日本通運と戦って、自由競争の運輸業界を作り上げた。

いずれも稀に見る自立心の強い人で、自分の会社のためであるが広い目で見れば〝国のために〟偉業をなしとげた。

その証しに昭和五十六年（一九八一）に出光が亡くなった時、昭和天皇は三月七日「出光佐三逝く」として「国のため　ひとよつらぬき尽したる　きみまた去りぬ　さびしと思ふ」という歌を詠まれた。

この二人のみならず自己責任で判断決定する会社経営者は自立心があるが、全般的に日本人は上や他人に頼る心、依存心が強くなっている。

民主主義の「個人尊重」がこの傾向に拍車をかけた。昔なら大人に蹴飛ばされかねない弱虫、泣虫が社会人の中枢を占めている。

こうした人は国（あるいは会社）に要求する一方で国を非難追求する。そして戦争で負けたことについて「国が悪い」「指導者が悪かった」という声に「そうだ、そうだ」と賛同する。これがA級戦犯を憎み、首相の靖国神社参拝に反対する考え方や「集団的自衛権反対」のデモにつながっている。

戦争に負けたという結果は変えられないが、そこに至るまでのすべてを「悪かった、間違っていた」と断ずる考え方は変えなければならないと私は思う。

誰も日米戦争を望まなかった

日本対アメリカの戦争は小人と巨人の対決であった。

昭和十七年（一九四二）六月のミッドウェイ海戦で、〝もしも〟作戦計画の不徹底がなければ、報告連絡の軽視と遅れがなければ、そして第一航空艦隊司令長官南雲忠一の判断の誤りがなければ……。また昭和十九年（一九四四）十月のレイテ沖海戦で、もしも栗田艦隊が反転して逃げることなくレイテ湾に突入してアメリカ陸軍の輸送船団を撃滅していれば……。

この二つの海戦で日本は勝利したであろう。それは真珠湾攻撃の勝利同様、相手の向こう脛に青アザをつけたくらいの戦果で、巨人はびくともしない。最後は高笑いしながら巨人は小人を片手でひねり潰す。

日本とアメリカの当時の戦力比。昭和十五年（一九四〇）～十八年（一九四三）の四年間の実戦に使われた戦車の数は日本が四、〇一五輌、アメリカが五七、七〇〇輌。

同時期の主力戦闘機五種の生産数は日本のゼロ戦や隼など合計二五、〇〇〇機、対するアメリカのムスタングやカーチスなどが合計八五、〇〇〇機。

艦船は日本も七万トン級の大和や武蔵などの巨艦を作ったがアメリカは大型航空母艦に力を入れ、艦船数や排水量総トン数は日本一に対してアメリカ三の比率であった。

昭和十六年の開戦当時、戦力差は目立たなかったが月日がたつにつれてその差は大きく開いていった。

「一九四二年（昭和十七年）のはじめ、FDR（フランクリン・ローズベルト大統領）がその年の年産額、飛行機六万機、タンク四万五千台。対空高射砲二万門、艦船八百万トン、その他多くのものを含む生産計画をたて、一九四三年には更に、飛行機十万機、タンク七万五千台、対空高射砲三万五千門、艦船一千万トンという厖大な数字に引き上げた……。一九四三年末、戦争のための総経費は二千二百五十億ドルに達し、この額は『ワシントンの大統領就任以来のアメリカ政府の総支出よりも多かった』」（ジョン・ガンサー著「回想のローズベルト」より）。

この生産計画を軌道に乗せるまでに時間がかかり、飛行機や艦船の多くが戦争に間に合わなかったほどである。

日米の戦力差は二十倍以上あったろう。ひとつひとつの武器では三倍から十倍程度の差しかない。だが総合的な物量の差はやはり二十倍と見るのが妥当だろう。当時の日本のGDP（国民総生産）を一とするとアメリカは八〇くらいだったと言われている。

日本はこの巨人に命がけで体当たりした。いや、してしまった。

当時、目が見える人は誰もアメリカとの戦争を望まなかった。反対した。惨めな結果が解っている戦争など思いも及ばなかった。

それがいつしか天皇陛下まで「やむをえぬ」と裁断を下すまでに変わり、ついに開戦となった。なぜそうなったのか。

日露戦争が無謀な戦争の原因

小説家の佐藤愛子が父紅緑の人生訓として「人は負けるとわかっていても戦わねばならぬ時がある」という詩人バイロンの言葉を紹介している。娘愛子は父がこの言葉を口癖にしていたので覚えてしまったと書いている。

長いものには巻かれよという。その反対に我慢の限界という言葉があり堪忍袋の緒が切れるという言葉もある。後がない状況、殺されるかもしれない時は相手がどんなに強くても抵抗する。そのまま死ぬよりは敢然と戦う。戦えば窮鼠猫を噛むのように猫が逃げ出すこともあるからである。

明治三十七年（一九〇四）、日露戦争。世界中が負けると予想していた日本が勝った。

地球上で初めて「あり得ないこと」が起きた。欧米白人国では白人至上主義が席巻した。「白人は優秀で他は劣等」を科学的に証明する「優生学」がはやり、米国では人種差別の行動団体KKKが勢力を伸ばした。黄色人種日本の台頭が不愉快きわまりなかったのだ。

遅れて帝国主義活動に入った米国は、急速に力をつけて白人国に並んで中国に進出する日本と利害が錯綜した。日本は危険な国であり滅ぼさねばならない相手と見て周到に殲滅計画を立てた。

ソ連の〝負けた恨み〟は強かった。日露戦争当時のニコライ皇帝は「黄色い猿」と日本を見下し「さっさと片付けよ！」と叫声をあげていた。その猿に負けた屈辱は共産党政権のソ連になっても消えない。日本海海戦での艦隊全滅の恨みは必ずいつか晴らす！

米ソ首脳、F・ローズベルトとスターリンは日米戦争開始の遥か何年も前から「日本絶滅」の意志を確認し合っていた。

世界一、二の資源大国の米ソに睨まれた日本は窮鼠であり風前の灯だった……。